



路上のサイエンスカフェ



ラマルクの生きた時代を語る  
白井治子さん



真剣！

# 北天満 サイエンスカフェ

## 「通りすがり」大歓迎、道半分を占領、 「進化論の今」——北天満サイエンスカフェ



Photos: 中西真誠

あおやま・りゅういち  
黒崎東商店会会長。「北天満サイエンスカフェ」  
の立ち上げに奔走した。

おがわ・まなみ  
大阪大学法学部3回生。「北天満サイエンスカフェ」  
学生スタッフ。

ながの・やつひさ  
1957年生まれ。神戸大学理学部卒業後、大阪大学大学院理学研究科  
修了。理学博士。現在、大阪大学大学院理学研究科構造熱科学研究所  
センター複雑系熱科学部門講師。専門は複雑系の熱力学、平和学。

大阪は北区、  
アーケードのある天五中崎通商店街で、  
科学者と市民が対話する「北天満サイエンスカフェ」。  
ストリートで行うサイエンスカフェとはいったい？  
心躍らせながら事務局のみなさんに話を聞いた。

出入り自由、  
お茶飲む気軽さで科学談義

月に一度、商店街の一角で道幅の半分はパイプ椅子とテーブルを並べて、「北天満サイエンスカフェ」がオープンする。そこに腰かけるのは、性別も年齢も職業もさまざまなたち。近所の人もいれば、遠方からわざわざやって来る人もいる。しかし、参加者で一番多いのは「通りすがり」だといふ、楽しいカフェだ。

「出入りも自由でよし、発言する、しないも自由。質問や議論も大歓迎です。ここは、お茶を飲むような気軽さで科学について話してみようという場。知りたい話題について知識や情報を得て、そして生活を豊かにすることにつなげてもらえれば」と長野八久さん（大阪大学大学院講師）は話す。

黒崎東商店会が主催する「北天満サイエンスカフェ」は、09年の10月に大阪大学とのコラボレーションによって始まった。その仕掛け人でもある長野さんは、英国やフランスから始まり、今や世界各地で開かれているサイエンスカ

フェという取り組みに、以前から深い関心を寄せていたという。「僕自身、この30年間ほぼ研究室に閉じこもりっぱなしだった気がするんですよ。だから、サイエンスカフェを地域の人たちと近い距離で実現できればいいなとずっと考えていたんです」

そんな時、商店街活性化を模索していた青山隆一さん（黒崎東商店会会長）と出会ったことで話が進み、開催場所などのハード面を商店会が、講師や話題探しといったソフト面を長野さんや学生たちが担当することで、地域密着型のユニークなサイエンスカフェが誕生した。

最近、天五中崎通商店街の真ん中に、空き店舗を利用して「北天満サイエンスカフェ」の基地が完成した。10人も入れればいっぱいになるようなセミナールームだが、正面はガラス張り内部の様子は外から丸見え、インパクトのある壁面いっぱい黒板（※）。ここにスタッフが集まって企画を練った

も小川愛美さんはその中心的存在で、話題提供者と参加者の自然な対話をイメージしながらコーディネートをするという。

「私は文系なのですが、文系の視点あるいは市民の目線から『その専門用語はわからない』と指摘したり、『こういうことをもっと知りたい』と提案したいと思っています。話題提供者だけが話すのではなく、どう対話へつなげるかということも課題の一つですね。今は質問タイムを別に設けているんですが、あえて設けなくても会話の中で自然に質問が出るというのがカフェの理想の姿なんです。少しずつ、そこに近づいていくのが目標です」

たとえば「睡眠」をテーマにした回では、地域に住む年配の女性がふらりとやって来て椅子に座り、「私、こんな悩みがあって眠れないんです」と話題提供者に相談を始め、他の参加者もそのやり取りにじっと耳を傾けるということがあったという。

町人が文化を育てた大阪  
日常的に集うカフェへ

「大阪は江戸時代に山片蟠桃など、知的好奇心の旺盛な町人が学術・文化を育てたまち。今は、大学は郊外へと出て行ってしまっていますが、教員や学生たちは再びまちへと戻ってくる必要があるん

ではないでしょうか」

イベント的な開催ではなく、研究者や学者、地域の人が日常的に集える場ができ、そこで気軽に科学についての話ができるようになれば……と長野さんはカフェの未来図をそう描く。商店街のミニセミナー室もその目的で作られた。

「商店街も積極的に文化を発信していかないとダメです。それが訪れる人を増やし、活性化につながっていくべきではないかと。学生さんの姿が増えるだけでも、まちの雰囲気は大きく変わります」と青山さん。商店街側としても大歓迎の姿勢のようだ

「これまでの十数回の開催を通じて感じるの、どなたも大きな関心をもって参加してくださっているということ。その知的欲求の旺盛さを実感しています。このようなカフェが各地に広がって、知りたい話題について科学者と自由に話ができる機会が増えるといいなと思います。それが生活を豊かにし、まちの活性化にもつながっていくれば、さらにうれしいことですね」(松岡理絵)

※内装は大阪のデザイン事務所Ghatによるもの。

北天満サイエンスカフェ  
第17回サイエンスカフェのお知らせ  
テーマ・コラーゲンの秘密  
日時…8月21日(土)16時~18時  
話題提供者…杉原富子さん(新田ゼチン)  
※予約不要、参加無料(喫茶店で開催の場合、飲み物は各自注文)  
http://www.kitamama-cafe.com/

り、ミニサイエンスカフェも開かれる。

ヒトはなぜ助け合う？  
生活に根ざしたテーマを

「科学と聞くと理系の話題ばかりが思い浮かぶかもしれませんが、歴史や経済、法律や思想といった人文社会科学といわれる分野も科学なんです。健康、衣食住、子育てといったことももちろん含みますし、あらゆる話題が科学の対象になります。それに、どうしても先端科学ばかりが話題となり注目されますが、研究はもともと生活の中のとらえた疑問から始まるもの。ですから、このカフェではそのような生活に根ざした部分を大切にしていきたいと思っています」と長野さんは話す。

夏休みや春休み期間中には、特別におもしろ科学実験をメインにした子ども向けのテーマで開催。紙コップでエコーマイクを作った

り、フィルムケースで笛を作ったりと、大人の知的好奇心も十分に満たしてくれる内容である。

これまで取り上げたテーマは、たとえば「水道水は飲んだらあかんの？ あなたは水道水派？ ミネラルウォーター派？」「人間はなぜ助け合うのか？」「ヒトという動物の面白さ」「ニュートンも没頭した錬金術—なぜ人間は金を作ろうとしたのか？」「ラマルク『動物哲学』から200年、進化論の今」など、ジャンルは実に多彩。

商店街のストリートで、毎回場所を移動して開かれるサイエンスカフェ。通りすがりの人もお茶とお菓子が振るまわれ、科学談議を堪能できるのだ。

最後まで身ぶり手ぶりで、  
気軽な対話が  
カフェの理想の姿

しばしばサイエンスカフェはセミナールームなどを借りて講義形

式で行われているが、「北天満サイエンスカフェ」はそれとは一線を画している。長野さんは話す。

「話題提供者には、専門用語や資料はできるだけ使わず、身ぶり手ぶり」で最後まで話してくれ！とお願いします。啓蒙が目的ではないですし、一方的に知識を伝えるというスタイルを取りません。気軽な対話を目指しているカフェであり、子どもから年配の方まで参加されるので、誰にとってもわかりやすい言葉で話すことが大前提なんです」

そして、話題提供者は、研究者や専門家、現役教員などだ。最近では、商店街の近くの教育関係会社勤めの人から「子ども向けの実験を提案したい」と声がかかるなど、「立候補」も現れるようになってきた

とはいえ、研究者が専門用語を使わずに話すというのはなかなか難しい。そういった面をフォローするのが学生スタッフだ。中で